陸奥国荷札の「発見」

はじめに　陸奥・出羽からの貢進物付札（荷札木簡）は、都では出土しないのが「常識」である。出土例がみられなかったこと、両国の調庸物は征夷のため都に貢進されなかったという研究などが、この常識を裏打ちしてきた。しかし、近年行っている再調査で、既報告の木簡中から陸奥国の荷札木簡が「発見」された。

検討の過程　当該資料は、『平城宮木簡　三』3058号。『平城宮木簡』では、国郡名は読めておらず、わずかに「郡」字だけを読む。「表は、腐朽・損傷の部分が多い。」と解説しており、釈読の困難さを示す。法量は縦319㎜幅25㎜厚さ6㎜と、かなり大型で厚みもある。現状では保存処理済み。

赤外線テレビカメラ装置を用いて観察したところ、国郡名部分の筆画をかなり追うことができた。国名一文字目は左側にこざとへんらしきものが、右側には四本ほどの横画が認められ、二文字目は上半分に箱状の筆画が、下半分に「大」の筆画が認められた。「国」字についてはほぼ確実に確認され、郡名についても「石取」もしくは「名取」と釈読された。

陸奥荷札の発見　一文字目にこざとへんがつく国は、「陸奥」しかない。一方、『倭名類聚抄』には石取郡はなく、名取郡が陸奥国にある。よって「陸奥国」の可能性が極めて高いが、「奥」字が字典類に載っている崩し方とやや異なる。そこで『平城宮木簡　四』4024号の「陸奥」字や正倉院文書（「上階官人歴名」『大日本古文書』二四―74・続々修二四秩五裏など）中の文字などと参照し、「陸奥」と釈読して良いと判断した。

「御」字の上は「布」字であり、「郡」字の下は郷名ではなく品目名。「籠」という単位、『延喜式』の規定などから、品目は昆布であろう。品目の一文字目は糸偏とみられ、「細」・「縒」・「縄」などが想定される。「籠」字の下の寄せ書きは、重量を記している可能性が高い。

以上より、本木簡は陸奥国名取郡からの贄の昆布に付けられた荷札木簡である。

おわりに　今回の「発見」は、「陸奥・出羽の荷札は出土しない」という常識を覆した。今後は新たな目で資料を検討する必要があろう。　（馬場　基）

図32　6：5

陸奥国名取郡□□布御贄壱籠□□　天平元年十一月十五日　319×25×6　031

図31　4：5

図30　4：5

図30　3058号木簡　可視光写真
図31　3058号木簡　赤外線デジタル写真
図32　4024号木簡